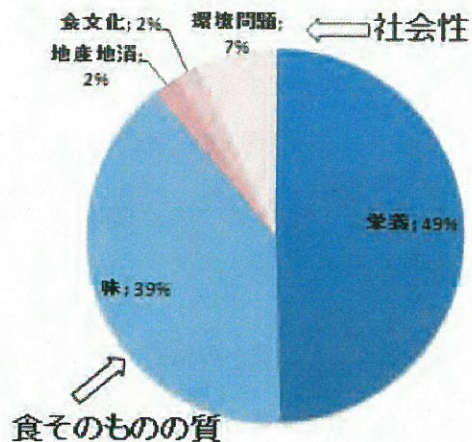


図 4-5：保守的で内向きな食に対する考え



●食に対する考えは保守的で同時に内向きである

① 食事は家族団らんの場として重視(86%)し、和食から洋食への転換には消極的(6～7%)。

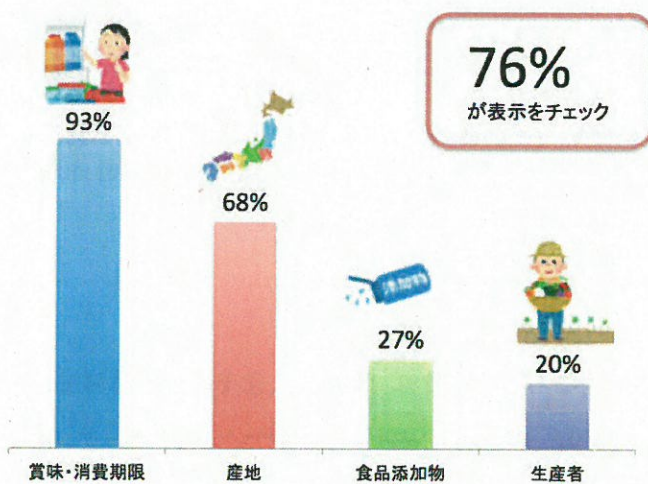
② 食で一番気にするのは、栄養(49%)・味(39%)など食そのものの質で、地産地消(2%)・食文化(2%)・環境(7%)と社会性を以て食を考えるのは非常に少ない。

●食事の仕方は健全な状態を維持しながら、合理化を探る

① 毎日朝食(85%)し、欠食を避け(70%)、夕食での外食・中食は少なく(80%)抑え、ご飯食を主とした食事(88%)。

② 4人に一人は調理ができず(23%)、半数が料理時間短縮に努力している(50%)。

図 4-6：食材購入時の表示チェック割合とその内訳

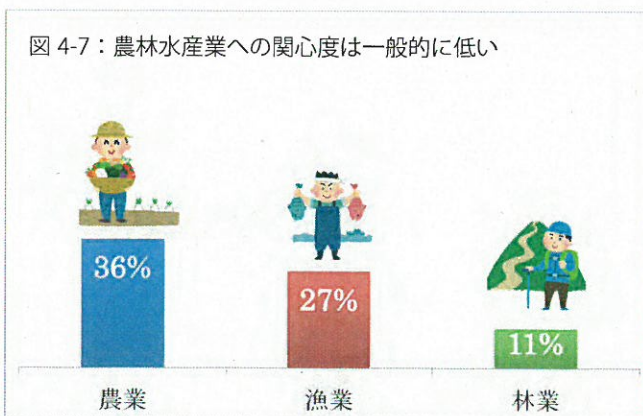


●食材購入の行動は一般的な姿

① 月食費は3～5万円、食材の買物回数は週2～3回が平均値。料理の食材購入は殆どスーパー(96%)で、生協宅配(13%)が若干ある。中食の場合もスーパー(84%)が主であるが、生協に代わってコンビニ(12%)に頼る。

② 4人の内3人が食材購入時に食料品表示をチェック(76%)し、その項目は賞味・消費期間(93%)・産地(68%)が主で、食品添加物(27%)・生産者(20%)を気にするのは4～5人に一人である。

図 4-7：農林水産業への関心度は一般的に低い



農業は3人に1人、漁業は4人に1人、林業は10人に1人

●農林水産業に関心を持つ人は一般的に少数派

① 農業に関心を持つのは36%

② 水産業に関心を持つのは27%

③ 林業に関心を持つのは11%

4.2 働く世代における食の性差

●偏りの激しい食に関する知識のあり方という一般的傾向は男女ともに確認されるが、総じて女性の方が知識普及度はより高い

- ① 食に関する知識では 42 項目中 10 項目で統計的に有意差 ($p<0.5$) が確認できる。
- ② 性差が確認できた 10 用語の内、普及度の高い用語は、副菜(女性 89%、男性 79%)、偏食(同 95%、81%)、食育(同 84%、61%)、旬(同 85%、71%)、一日摂取必要エネルギー量(同 72%、59%)である。
- ③ 普及度の相対的に低い用語で性差が確認できたのは、孤食(同 41%、25%)、小食(同 48%、31%)、三色食品群(同 48%、31%)、食事バランスガイド(同 25%、13%)である。

●食に対する考え方は保守的で同時に内向きであるとの傾向にも、顕著な男女差はない

- ① 男女ともに、食事は家族団らん(女性 92%、男性 83%)として重視し、ご飯食からパン食への転換(女性 8%、男性 5%)には消極的である。
- ② 食で一番気にするのは、栄養(女性 60%、男性 44%)・味(女性 37%、男性 39%)など食そのものの質で、地産地消(女性 0%、男性 3%)・環境(女性 9%、男性 5%)など社会性を以て食を考えるのは非常に少ない。栄養と地産地消に関しては、統計的な有意差が認められている。

●男女ともに、食事の仕方は健全な状態を維持しながら合理化を探る傾向はある

- ① 毎日朝食(女性 94%、男性 81%)し、日常的な欠食は(女性 11%、男性 22%)、夕食での外食・中食は少なく(女性 87%、男性 78)抑え、ご飯食を主とした食事(女性 89%、男性 87%)。毎日朝食、日常的な欠食に関しては、統計的な有意差が認められている。
- ② 一般的傾向として 4 人に一人ができない調理に関しては、明確な性差が認められ(女性 6%、男性 31%)、調理に関わる度合いの強い女性の方が料理時間短縮に努力している(女性 65%、男性 42%)。調理に関しては、統計的な有意差が認められている。

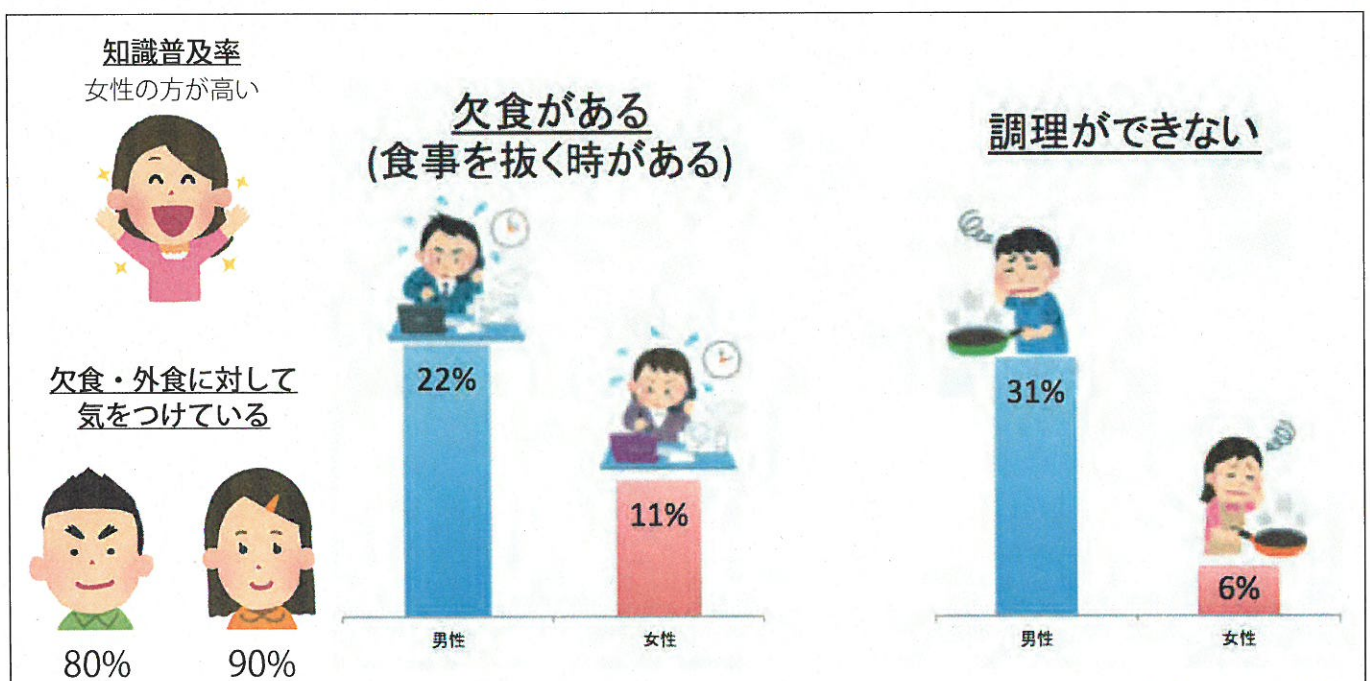
●食材購入の行動には男女の差異は殆ど無く、ともに一般的な傾向を示している

- ① 買物回数は週 2~3 回、
- ② 食材購入は殆どがスーパー。
- ③ 食料品表示チェックは大多数がするものの、女性の方が積極的である(女 82%、男 73%)。④その項目は賞味・消費期間(女 94%、男 92%)・産地(女 76%、男 64%)が主。

●農林水産業への関心は男女ともに低い、相対的に男性の方が関心度は高い

- ① 関心を持つ比率では農業(女 32%、男 38%)でも、
- ② 漁業(女 19%、男 30%)でも、
- ③ 林業(女 7%、男 12%)でも、男性の方が高い比率を示している。

図 4-8：食にみる男女差



4.3 対象グループと制御グループの比較（活動有無の差）

●偏りの激しい食に関する知識のあり方という一般的傾向は対象グループ・制御グループともに確認され、ほとんどの項目で有意差は無いが、「食育」（対象 G74%、制御 G56%）と「日本型食生活」（対象 G62%、制御 G29%）の2項目では有意差があり、食育活動の効果が認められる。

●食に対する考え方は保守的で内向きであるとの傾向も対象 G・制御 G ともに確認され、ほとんどの項目で有意差は無い。食事は家族団らんの場として重視している（対象 G86%、制御 G85%）が、和食から洋食への転換には対象 G は制御 G よりもはるかに否定的である（対象 G3%、制御 G12%）。食で一番気にするのは、栄養（対象 G50%、制御 G45%）・味（対象 G38%、制御 G41%）など食そのものの質で、地産地消（対象 G1%、制御 G4%）・環境（対象 G 7 %、制御 G 7 %）などの社会性を以て食を考えるのは非常に少ない点には対象 G・制御 G に統計的有意差は無い。

●食事の仕方に関しても、対象 G・制御 G ともに、健全な状態を維持しながら合理化を探るとの傾向を示すが、相対的に対象 G がより積極的な姿勢を示す。特に、冷凍食品などの使用を避けるのは、対象 G が明確に強い傾向を示す（対象 G31%、制御 G16%）。統計的有意差とはなっていないが、欠食に関しても、対象 G がより強く避ける傾向になっている（対象 G74%、制御 G64%）。

●食材購入の行動に関しては、（対象 G・制御 G 間の差異は全くと言えるほど無い。買物回数は週 2~3 回、食材購入は殆どがスーパー。食料品表示チェックは大多数がし、その主なチェック項目は賞味・消費期間・産地である。

●農林水産業への関心は、対象 G・制御 G ともに低く、両グループに統計的有意差は無い。

図 4-9：対象グループと制御グループの比較（活動有無の差）

冷凍食品の使用を避ける傾向



欠食を避ける傾向

活動ありのグループの方が欠食を避けて傾向があった。

→ ご飯を3食食べようとしている。

